

『冬物語』における騙し再考：ロバート・グリーンを通して

内藤 亮一¹Rereading Deception in *The Winter's Tale* through Robert Greene

Ryoichi NAITO

Email:naitoh@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：シェイクスピア、『冬物語』、騙し、ロバート・グリーン、自然と人工の手

Keywords : Shakespeare, *The Winter's Tale*, deception, Robert Greene, Nature and Art

I はじめに

『冬物語』(*The Winter's Tale* 1610-11)は嫉妬と16年の悔恨の年月を経て、許しと和解に到るシェイクスピア晩年の劇である。その過程において、いくつもの騙しのモチーフがある。レオンティーズ(Leontes)の嫉妬とハーマイオニ(Hermione)への中傷と自己欺瞞に始まり、ポーライナ(Paulina)の観客をも騙す嘘、オートリカス(Autolycus)の田舎の素朴な人々への詐欺と窃盗、父子で騙し合うフロリゼル(Florizel)の羊飼いの扮装とポリクシニーズ(Polixenes)の変装と暴露、それらの舞台となるパストラル世界の虚構性などである。それらの「騙し」が嫉妬・悔恨・許し・和解の要因となり、劇を動かしていく(内藤 97-107)。ただし、これら作品内部に限定された「騙し」のモチーフの分析からは、通常パストラル・ロマンスに分類されるこの劇に、オートリカスというおよそパストラルに似つかわしくない詐欺師が登場することの違和感は解消されない。主なる種本には登場しないこの人物をシェイクスピアが敢えて加えたことの意味は何なのか。それを探るにはこの劇の主筋の種本を書いたロバート・グリーン(Robert Greene)が、その他に書いた当時の文学ジャンルの一つである「ならず者文学」(rogue literature)でオートリカスのような人物を描いていたことを思い出さなければいけない。つまりシェイクスピアは『冬物語』において、グリーンの一見ジャンルの異なる作品を一つに詰め込んだのであり、『冬物語』を単なるパストラル・

ロマンスではなく、「騙し」に満ちた当時の英国文化と密接につながるものとしたのだ。それを読み解くには、この劇とグリーンおよび「ならず者文学」との関係性を抜きにすることはできない。晩年のグリーンがシェイクスピアの演劇界への華々しい登場に対して「成り上がり者のカラスが我々の羽根(文体)で着飾って・・・舞台を揺るがす(Shake-scene)ことにかけては国一番と思っている。"there is an vpstart Crow, beautified with our feathers, that . . . supposes he is . . . the onely Shake-scene in a country." (Green, *Groats-Worth* 45-46)」と揶揄したと考えられているのは有名な話である。ある意味で作品を騙し取られた、ということであり、ならば、なおさら、時を経て、シェイクスピアがグリーンを種本とし、さらに「騙し」に関するグリーンをそこに接ぎ木したことは意味深いものである。

シェイクスピアとグリーンとの微妙な関係を考えると、『冬物語』には劇中16年の時の経過があり、登場人物たちの和解に至るが、それはグリーンがシェイクスピアを揶揄したと言われる『グリーン一文の知恵(*Groats-worth of Witte*)』(1592)から1610年頃に『冬物語』が書かれるまでの、約18年の時の経過とほぼ同じ年月であるのは、シェイクスピアからの和解の意があるようにもみえる。『冬物語』とグリーンとの関係についてはメンツ(Steven R. Mentz, "Wearing")の論文が多くのことを示唆してくれるが、『冬物語』のなかには、「グリーン」(green)という言葉への三回の言及がある(Mentz, "Wearing" 76-77)。また、シェイクスピアがグリーン『パンドスト』(*Pandosto* 1588)を種本とする

¹ 富山大学教育学部

とき『パンドスト』の再版は『冬物語』執筆以前に少なくとも1592, 1599, 1607, 1609年の4回あるが、1607年版以降と、それ以前の版では神託の台詞の部分が一語, "live" から "die" に替わっていることから、『冬物語』では以前の版を使ったことがわかる (Pitcher 405)。つまり、再版があったにもかかわらず、92年没のグリーン存命時の版を選択している。それらのことから、この作品はグリーンへの何らかのオマージュではないかとも思われてくるのだ。

このようなグリーンと『冬物語』の深い関係に注目し、本稿では『冬物語』の「騙し」について、作品内部の分析だけでなく、グリーンおよび「ならず者文学」と『冬物語』の関係を明らかにすることで、『冬物語』が当時の英国の「騙し」の文化とつながっていることを示すとともに、併せて「自然」(nature) と「人工の手」(art) の問題を「騙し」の観点から考えてみたい。

以下、『冬物語』とグリーンとの関係について、「騙し」との関連で、(1)『冬物語』と種本である『パンドスト』、(2)『冬物語』と作家グリーン、(3)『冬物語』の登場人物オートリカスとグリーンに焦点を当て、最後に「自然」と「人工の手」の関係について考察する。

Ⅱ 『冬物語』と『パンドスト』

1. 種本にない二人の役割

『冬物語』の主な種本はグリーンの初期のパストラル・ロマンス『パンドスト』であるが、シェイクスピアは種本にない二人の登場人物を付け加えている。詐欺師オートリカスと大団円で死者の再生と許しと和解を演出するポーライナである。種本では、主人公であるパンドスト王は最後に娘との再会に歓喜しつつも、友人を裏切り、妻を死なせ、娘に欲情を抱いたことで鬱となり自害する。その部分をアーデン版『冬物語』に収録された *Pandosto* から引用する。

Which was no sooner ended but Pandosto, calling to mind how first he betrayed his friend Egistus, how his jealousy was the cause of Bellaria's death, that, contrary to the law of nature, he had lusted after his own daughter, moved with these desperate

thoughts, he fell into a melancholy fit and, to close up the comedy with a tragical stratagem, he slew himself. (445)

終わるやいなや、パンドストは、彼が最初に盟友イギスツスを裏切った次第、彼の嫉妬がベラリアの死因となった経緯、また自然の掟に背いて彼がわが娘に欲情を抱いた経過を思い出して絶体絶命の想いにかかれ、鬱病におちいり、この喜劇を悲劇的な策謀で締めくくろうと、われとわが身を滅ぼしたのであった。

グリーンと種本では、引用にあるようにパンドスト王が「喜劇を悲劇的な策謀 (stratagem) で終わらせた。」それに対し、シェイクスピアは、種本にはない二人の登場人物を加え、彼らの「騙し」によって、逆に、悲劇を喜劇へと変える。二人の役割をそれぞれ見ていこう。

二人のうちの一、オートリカスはいわゆる「ならず者文学」に登場する代表的な悪党であるが、ボヘミアの王子フロリゼル逃亡に一役買う。種本では逃亡用衣装を王子が自分で用意するが、『冬物語』では、たまたま逃亡計画の場において、貧しい人物のふりをするオートリカスに、カミロ (Camillo) が王子と衣装を交換するよう命令する (4.4.629-50)。オートリカスは「巾着切り "cutpurse" (4.4.676)」の鋭敏さで、王子らの計画が胡散臭いことに気づくが、「これを暴かないのがより悪党らしいし、それでこそ、おれの職業に忠実だってことよ。"I hold it the more knavery to conceal it, and therein am I constant to my profession." (4.4.684-86)」, と言って、ふたりの逃亡を黙認する。なにかあったときに、貧乏人のふりをするのは、ならず者の「騙し」の常套手段である。さらにオートリカスは、王子と交換した服を利用して宮廷人のふりをし、王子逃亡を邪魔しかねない羊飼いを騙して、船に搭乗させる (4.4.715-847)。種本では、やはり邪魔になりかねない老羊飼いを、無理やり船に乗せてしまうのは王子の老僕である。それに対し『冬物語』では、オートリカスの「騙し」が偶然に王子を助け、結果的に「騙し」が幸せな結末へと導く重要な役回りを果たしたことになる。

そして、もう一人のポーライナは、本当は生きている王妃を亡くなったものとし、観客も含めて全ての人を騙すことで、レオンティーズに悔恨の機会を与えることになる。種本では、王妃は亡くな

り、パンドスト王は後悔しながらも、娘フォーニア (Fawnia) に欲情するという大罪を犯してしまう。そして、『パンドスト』では娘に欲情した真実を知ることが王の自害という悲劇的結末に繋がっている。

一方『冬物語』では、レオンティーズが一瞬、娘のパーディタ (Perdita) に心ときめくが、すぐにポーライナに諫められ、レオンティーズの近親相姦の欲望は無害なものになるのである (Pitcher 326)。

LEONTES. Would he do so, I'd beg your
precious mistress,
Which he counts but a trifle.

PAULINA. Sir, my liege,
Your eye hath too much youth in't. Not
a month
'Fore your queen died, she was more
worth such gazes
Than what you look on now.

LEONTES. I thought of her
Even in these looks I made. (5.1.222-27)
レオンティーズ であれば、あなたの大事なお
妃をもらいたいものだ、
父上はその人をつまらぬものとお考えのよう
だから。

ポーライナ 陛下、
あなたの目は若すぎますよ。お妃様は、亡く
なられる
ほんの一月前でも、いまじっと見つめておい
でになる
そのかたより美しいかたでした。

レオンティーズ いま見つめていたのは
あれのことを思い出してであった。

ポーライナの役割は、種本では存在しなかった王へ忠言するものでもあるが、娘への欲情を諫めたのは、王妃が活着していることを知っており、王を騙しているからできたことである。この時点でポーライナもパーディタが王の娘であることは知らないもので、もし王を騙しておらず、種本同様に王妃が亡くなっていたならば、王の再婚を頑なに禁ずることはしなかったであろう。ポーライナの騙しが、種本と逆に、真実が明らかになった時、それまでの悲劇が赦しと和解に繋がるという喜劇的結末を作り出したのである。

『冬物語』における「騙し」は、前半では種本同

様に妻に不倫され「騙された」と妄想した王の中傷を生み出し、悲劇の要因にもなる一方で、後半では種本と異なり、「騙し」が喜劇に導くための大事な手段ともなるが、その役割を担ったのが、シェイクスピアが付け加えたこの二人の登場人物である。

2. 真理は時の娘

ここでもう一つ『冬物語』と『パンドスト』に関して指摘しておきたいのが、『パンドスト』の副題「時の勝利」(*The Triumph of Time*) である。¹これはもちろん16年の時を経て真実が明かされるということであるが、「真理は時の娘」(*Veritas temporis filia*) というように、パンドスト王の娘が羊飼いの娘フォーニアとして生きていることが明らかとなる。

1586年出版のジェフリー・ホイットニー (Geoffrey Whitney) の『寓意画選集』(*A Choice of Emblemes*) には、「真理は時の娘」の題名のエムブレムがあるが、そこでは「妬み」、「争い」、「中傷」によって土牢に閉じ込められた「真実」が「時」によって救い出される。エムブレムに付された説明の一部を引用する。

Both Enuie, Strife, and Slaunder, heare
appeare,
In dungeon darke they longe inclosed truthe,
But Time at lengthe, did loose his daughter
deare, . . . (4)

「妬み」、「争い」、「中傷」がここに現れ、暗い土牢に長く「真実」を閉じ込めた、しかし、「時」がついに、大切な「時」の娘を解放した . . .

これは、パンドスト王の妬みと中傷によって捨てられたフォーニアが発見され救い出されたことに当たる。『冬物語』では、フォーニアと同じ理由で捨てられた娘パーディタのみならず、死んだと思われたハーマイオニまでもが、時を経て発見され救い出される。ポーライナが、中傷を受けて死んだと思われているハーマイオニの像に、大団円の場で動くように、というときの台詞は、ホイットニーのエムブレムを思い出させる。

'Tis time; descend; be stone no more; approach.
Strike all that look upon with marvel. Come,
I'll fill your grave up. (5.3.99-101)
時間です、台からおり、石であることをおやめ

ください。

さ、こちらへ。皆様を驚かせるのです。

あなたのお墓は私がふさぎましょう。

ポーライナはハーマイオニの墓をふさぐと言うが、それは「真実」が土牢に閉じ込められていたことを連想させ、16年を経た「時」が「真実」をそこから救い出すことを意味する。それを可能にしたのがポーライナの「騙し」であり、「嘘」が「真実」を救い出す助けになったのである。

ロンドンのナショナル・ギャラリーにある1545年ころに制作されたとされるブロンツィーノ (Agnolo Bronzino) 作の有名な絵画「愛の寓意」(An Allegory with Venus and Cupid) にはヴェール (カーテン) に手を掛ける「時」が描かれている。この絵においては、「時」がヴェールで隠そうとしているのか、ヴェールを開けようとしているのかは定かではないが、少なくとも『冬物語』との関連では、この場面は、まさしく最後の場面でカーテンが開けられて、隠されていたハーマイオニの姿が現れ (5.3.20.SD)、今にも真実が明らかにされようとする「時の勝利」の場面を想起させる。

Ⅲ 『冬物語』とロバート・グリーン

次に『冬物語』と作家としてのグリーンの関係について見ていく。

1. 『冬物語』とグリーンの作品ジャンル

シェイクスピアは種本に二人の人物を加えたわけだが、このことによって『冬物語』はグリーンの作家人生での三段階それぞれのジャンルを含むことになる。グリーンは最初にリリー (John Lyly) の影響を受けた『バンドスト』などのロマンス物を書き、それに続いて、掬摸・詐欺・いかさまを暴く「ならず者文学」に手を染める。「ならず者文学」は16世紀から17世紀初頭にかけて、様々な詐欺などを描いたもので、古くは中世道徳劇の *Mankind* にも記述が見られる (Kinney 14)。特に知られたものが、Thomas Harman, *A Caveat for Common Cursitors Vulgarly Called Vagabonds* (1566) である。グリーンがこれに手を染めたのが、「いかさまシリーズ」("cony-catching" pamphlets 1591-92) である。そして、最後に書いたジャンルが「悔恨もの」(the repentance tracts 1592) である。『冬物語』のメインプロットは最初に書いたジャンルで

あるロマンスの一つ『バンドスト』からで、付け加えた二人の人物が絡むサブプロットは「いかさま」と「悔恨」のジャンルと関係する。グリーンが書いた作品群が、それぞれに対応しているのである (Mentz, "Wearing"73)。

2. 暴露の構造

『冬物語』とグリーンを結びつける上で、もう一つ指摘しておきたいことが、両者に共通する暴露の構造である。

シェイクスピアの『冬物語』に関しては、前半の秘密に対し、後半にその「真実を暴く」(discover) という構造が大きな柱になっている。グリーンの作品が暴露の構造を持っていることについては、『バンドスト』については、前述したように副題「時の勝利」は「真理の暴露」を意味する。「いかさまシリーズ」三部作もいわば暴露ものであり、タイトルもそれぞれに「暴露」を意味する、discover という語が入っている。それぞれの題名は次の通りである。A Notable *Discovery* of Coosenage, The Second Part of Conny-Catching Contayning the *Discovery* of Certaine Wondrous Coosenages..., The Third and Last Part of Conny-Catching With the New Deused Knauish Arte of Foole-Taking. The Like Coosnages and Villanies Neuer Before *Discovered*. (下線は筆者)。

これらのシリーズは数々の「騙し」や「いかさま」について紹介すると同時に、それらを世間に暴いて、善人の益するところとするのが作者グリーンの望みであることが第三部 (The Third and Last Part) の序 (TO ALL SVCH) の最後にも断られている。引用は *Early English Books Online Text Creation Partnership (EEBOTCP)* のデジタル版からである。²

...if all these forewarnings may be regarded, to the benefit of the well minded, and iust controll of these carelesse wretches, it is all I desire, and no more then I hope to see.

これらの警告にご注意なさって、真面目な人のためになり、こういう無法者の公正な統制ともなれば、私が望み期待するところすべて満たされるというものです。

この暴くという点については、グリーンの「悔恨もの」である『一文の知恵』においても同じことが言える。この作品では、前半ではイタリア風の名前

の人物たちの悪事が語られ、その中で作家として成功した人物ロベルト (Roberto) がいかさま連中と仲間になって、悪事にかまけると同時に、そのいかさまを描いて作家として成功したことが描かれるが、最後の方でロベルトが不摂生で極貧になり、嘆く段になって、急にロベルトの話が終わり、グリーンがロベルトというのは、自分のことだと明かす。

Heere (Gentlemen) breake I off Robertoes speach; whose life in most parts agreeing with mine, found one selfe punishment as I haue doone. Heereafter suppose me the saide Roberto, and I will goe on with that hee promised: *Greene* will send you now his groats-worth of wit, that neuer shewed a mites-worth in his life: & though no man now bee by to doo mee good: yet ere I die I will by my repentaunce indeuour to doo all men good. (*Greene, Groats-Worth* 39)

ここで、みなさん、唐突ながら、筆者はロベルトの話をやめます。彼の生活の大部分がわたしの生活と合致しておったので、わたしと同じ罰を受けたからです。これから先は、わたしを件のロベルトとお考えください。さすれば、彼が約束したことを話し続けましょう。わたしグリーンが、一文の知恵を、いまみなさんに差し上げることにしましょう。生涯で一厘の値打ちも示せなかった男ですが。そして誰もわたしに親切にしてくれる人はそばにいませんが、それでも死ぬ前に、わたしの後悔ゆえに、すべての人に親切にすることに努めたいのです。

読者は察していたかもしれないが、少なくとも明かすまでは、グリーンは読者をついでいたともいえる。そもそも、初期のロマンスというジャンル自体が喪失と発見という構造を持っていることを踏まえれば、グリーンは作家人生を通じて、何かを暴露する作風はグリーンの得意とするところだったのかもしれない。

3. 「いかさまシリーズ」の虚実について

ただ、いかさまを世間に暴くという点については、その真偽は疑わしい点もある。ロマンスは「嘘くささ」を題材にしたものである。グリーンが作家として「いかさまシリーズ」に手を染めたとしても、内

容はフィクションの可能性も高く、それは同時に、彼の「後悔もの」にしてもそれが真摯なものかどうかは疑わしいところがある。

グリーン「いかさまシリーズ」が、作者が述べているとおり、社会へ詐欺師の悪行・やりかたを訴えるのが目的だったのか、ということに関しては、それを疑うような証拠がある。いかさま師カスバート (Cuthbert Cony-catcher) なる人物が書いた『いかさまの弁護』(*The Defence of Cony-Catching* 1592) というパンフレットがあるが、これは R.G. なる人物が「いかさま師」(cony-catcher) を告発したことに対する反論である。R.G. はグリーンを指すと考えられるが、カスバートも実はグリーンであろうと考えられている (Dionne 2)。グリーンは一方で詐欺師のやり方を暴露して非難すると言いながら、一方では弁護もしている。オーゲル (Stephen Orgel) はキニー (Arthur F. Kinney) の指摘として、これらのならず者を表象するパンフレットが、恐れや道徳的怒りに満ちているだけではないとし (Kinney 5), 「冗談本」(jest books) の雰囲気もあるとして、そこに記述された犯罪行為は娯楽として欠かせないもの、と指摘する (Orgel 51-52)。

IV オートリカスとロバート・グリーン

1. オートリカスの登場場面とグリーンは作家人生の3つのジャンル

『冬物語』がグリーンは作家人生の3つの作品ジャンルを含んでいるとしたら、オートリカスの登場する三つの場面も、グリーンは作家人生を反映している。オートリカスが登場する4幕3場、4幕4場、5幕2場は、それぞれロマンス、詐欺、悔恨に相当する (Mentz, "Wearing", 77)。

まず、第一の場面、4幕3場は歌から始まる。この場面ではオートリカスはパストラル・ロマンス風な四季に寄せた歌とともに現れる。その出だしを引用する。

When daffodils begin to peer,
With heigh, the doxy over the dale,
Why then comes in the sweet o'the year,
For the red blood reigns in the winter's
pale. (4.3.1-4)

水仙の花が顔を出し、
ヘイと女が谷越えれば、

一年での甘い季節がやってきて、
赤き血潮が冬の白さを支配する。

“doxy” (2) には、ならず者や泥棒の情婦の意があり (Pitcher 250)、ロマンスといえどもオートリカスらしい擦れた歌の風合いがある。そして、歌の合間に、昔は宮廷でフロリゼルに仕えていたが、今は失業の身であることを明かす (4.3.1-14)。ピッチャーは「仕える」の serve の意味に「だまし取る」(OED v.1 47a) の意味があることから、おそらくそれで追放されたのだろうと推測する (251)。そうであれば、出だしはロマンス風の歌から登場したが、この場面でも早速「いかさまシリーズ」の要素が見られるのは不思議でない。オートリカスは、毛刈り祭りの買い物に行く途中の羊飼いの息子 (Clown) から、追い剥ぎに襲われたふりをして財布を掏るのである (4.3.52-76)。オートリカスは地面に這いつくばり、「ああ、助けてくれ、助けてくれ！このボロを引き剥がしてくれ、そして死なせてくれ！“O help me, help me! Pluck but off these rags, and then death, death!” (4.3.52-53)」と叫び、羊飼いの息子が手を貸して助けようとするすきに財布を掏る。その手法は、グリーン『いかさま案内第二部』(*The Second Part of Conny-Catching*) の「聖ポール寺院で演じられた奇抜な掏摸の手口」(A kinde conceipt of a Foist performed in Paules) に記載された、病気のふりをしてそのすきにお金を掏る手法に似ている。EEBOTCP からの引用である。

…he cryed alas honest man helpe me, I am not well, and with that suncke downe suddenly in a sowne, the poor Farmer seeing a proper yong gentelma (as he thought) fall dead afore him, stept to him, helde him in his armes, rub'd him and chafte him: at this there gathered a greate multitude of people about him, and the whilst the Foiste drewe the Farmers pursse and awaye….

彼は、「ああ、正直なお人よ、助けてくれ、気分が悪い」と言って、地面に突然倒れた。気の毒な農夫は、立派な若い紳士(と彼は思った)が彼の目の前で死んだように倒れたのを見て、彼の方に駆け寄り、両腕に抱えて、さすったりこすったりした。そのときにはそこにたくさんの人が彼の周りに集まってきた。

それで、その際に、掏摸は農夫の財布を引き抜いて立ち去った。

この手法はいかさまの常套手段で、同じ手法はすでに Thomas Harman (1566) の“A Counterfeit Crank”の項にも記述されている。(Kinney 128-132 に Harman の作品は収録)。

第二の場面、4幕4場でもオートリカスは歌いながら登場するが、今度は行商人に扮し、物売りの歌を歌う。

Lawn as white as driven snow,
Cypress black as e'er was crow,
.....
Come buy of me, come, come buy, come
buy,
Buy, lads, or else your lasses cry. Come buy!
(4.4.220-21, 230-31)
薄手のリネンは吹き寄せの雪の白さ、
喪服の黒さは烏のよう、
.....

さあ、買った、買った、寄って来て買いな、
若者衆、買いな、恋人泣かすな、さあ買った。

今回は、最初から毛刈り祭りに集まった人々からお金を取るのが目的である。歌を歌って人を集め、その際に財布のありかを確認して、後で盗もうという算段である。羊飼いの息子に、悪いやつに気をつけるよう言い、人々に印刷された歌を売り、自分でも娘たちと一緒に歌ってみせる。(4.4.220-328)。この手法は『いかさま案内第三部』(*The Third Part of Conny-Catching*) の「いまひとついかさま師の話。この男、新案のいかさま術の手並みを是非とも試そうとし、その謀により一瞬にして六人余りを騙した次第を語る」(An other Tale of a coosening companion, who would needs trie his cunning in this new inuented arte, and how by his knauerie (at one instant) he beguiled halfe a dozen and more) に出てくるものに類似している。EEBOTCP からの引用である。

A roging mate, & such another with the were there got vpon a stal singing of balets, which belike was some prety toy, for very many gathered about to heare it, & diuers buying, as their affections serued, drew to their purses, & paid the singers for them. The slie mate and his fellowes, who were

dispersed among them that stood to hear the songs well noted where euerie man that bought, put vp his purse againe, and to such as would not buy, counterfeit warning was sundrie times giuen by the roge and his associate, to beware of the cut-purse, & looke to their purses, which made the often féel where their purses were, either in sléeue, hose, or at girdle, to know whether they were safe or no. Thus the crafty copesmates were acquainted with what they most desired. . . .

悪党仲間とその片割れが、通りで陳列台に腰かけ、歌を歌っていたが、それは面白いものだったのだろう、それを聞こうと大変な人ばかりで、好みに応じて曲を買うものもあり、財布に手をやって歌手たちに金を払っていた。例の詐欺師と歌を聞いている群衆に混じっていた仲間たちは、曲を買った一人一人の財布のしまい場所にしかと目を配っていた。買おうとしない者たちには、悪党とその相棒たちから何度も巾着切りにご用心、財布に気をつけなさい、との偽りの警告が発せられたが、それを聞くと人々は財布のしまい場所、袖口、長ずぼんやまた帯の中に、財布は大丈夫かと手をふれるのであった。こんな具合にして、これら悪党一味は、そのもっとも望むもののありかを知ったわけだ。

悪党一味が歌で人を集めて、歌を売りつけながら、他の連中が財布のありかを確かめる。そしてみんなが散り散りになる時に盗むのである。

オートリカスは、その後、自分のやったことを自慢するが、グリーンのかさまとほぼ同じである。

I have sold all my trumpery; . . . They throng who should buy first, as if my trinkets had been hallowed and brought a benediction to the buyer; by which means I saw whose purse was best in picture; and what I saw, to my good use I remembered. (4.4.601-2, 605-9)

がらくたいっさい売りつけてやったぜ。 . . . あの連中はおれのがらくだが神聖で、買い手に福を授けてくれるとばかりに先を争って買いやがった。おかげでおれはどいつの財布が

一番ふくらんでいるか目星をつけて、後で役に立てようという寸法だ。

第三の場面は5幕2場で、オートリカスは出世した羊飼親子に過去の過ちの許しを求める。そして生活を改めると誓う (5.4.146-152)。グリーンのかさまの「悔恨もの」に対応するが、グリーン同様にオートリカスの悔恨が真摯なものとは思われない。最後の言葉、「そうなるように、能力の限りを努めます。 “I will prove so, sir, to my power.” (5.2.166)」で、オートリカスが言っているのは「掏る能力」のことであるのは疑いない、とピッチャーは注で述べている (Pitcher 336)。

以上のように、オートリカスの登場場面はそれぞれ、グリーンのかさまと対応しているようにみえるが、全体としても、オートリカスは娯楽を提供する人物であり、その点で、作家と共通する部分がある (Orgel 51-52)。グリーンが「いかさま」を作家としての商売の種として売っているとすれば、その点でも、「まがい物」を売るオートリカスに共通するところがあり、オートリカスを通じてグリーンのかさまの存在がこの劇で常に顕在化されるのである。

2. オートリカスとマーキュリー

オートリカスがグリーンのかさまの書いたロマンス物や「いかさまシリーズ」を体現していることは、オートリカスの出自や守護神であるマーキュリー (Mercury) との関係を考えてより明らかになる。神話のオートリカスは、オデュッセウスの祖父とも言われるが、グリーンは最初ギリシャ・ロマンスを受け継いで作品を書いている (Mentz, “Magic” 241)。また、ロマンスの構造が「喪失—放浪—回復」 (loss-wandering-recovery) (Mentz, “Magic” 241) であるならば、オートリカスは宮廷を追われて放浪し、また宮廷に戻る点で、実はロマンスの登場人物であるともいえる。そして、オートリカスおよび『冬物語』全体の背後にいるのが、オートリカスの守護神であるマーキュリーである。

My father named me Autolykus, who being, as I am, littered under Mercury, was likewise a snapper-up of unconsidered trifles. (4.3.24-26)

おやじはおれにオートリカスという名前をつけたけど、おれと同様、マーキュリーの星のもとに生まれ、同じようにつまらない小物を

かすめる小泥棒だった。

マーキュリーは窃盗の守護神としてだけでなく、オートリカスにとって商業の守護神でもある。ホメロス (Homer) では、オートリカスはマーキュリーの息子でもある。オウィディウス (Ovid) では、オートリカスは双子であり、もう一人はアポロの子フィラモン (Phyllamon) である。『冬物語』における歌い手としてのオートリカスはこの双子の片割れである、音楽の神の子フィラモンに、詐欺師よろしく扮装していると言える (Pitcher 142)。

この劇におけるマーキュリーはオートリカスだけの守護神ではない。Stuart M. Kurland は、レオンティーズを説得するポーライナの雄弁をマキャベリ的であると評するが、マーキュリーは「雄弁」の神でもある。マーキュリーはさらに靈魂導師 (psychopompos) として、プロセルピナ (Proserpina) を冥界から導いたように、ハーマイオニとパーディタを象徴的な死の世界から導き、復活させる役割も担っている。そもそもハーマイオニという名前はマーキュリーのギリシャ神話の名前ヘルメスとも結びつく (Pitcher 141)。またパーディタが冥界に連れていかれるプロセルピナに言及する (4.4.116) のは意味深いことである。パーディタの名前は、「失われた」子から来ており (Pitcher 141)、いわば、冥界に連れ去られたプロセルピナであって、ある意味で、ハーマイオニ (マーキュリー) に導かれて、発見され戻ってきた。

そしてオートリカスは、この守護神のおかげで、「嘘」によって羊飼いをレオンティーズのもとへ届ける「使者」の役割を果たしたのでもある。マーキュリーは「嘘」と「泥棒」の他に「使者」の神でもある (Orgel 52-53)。このようなマーキュリーの重要性を考えれば、マーキュリーを守護神とするオートリカスがこの劇に登場するのは十分に理解できることである。メンツの言葉を借りれば、ロマンス劇において、オートリカスをして、ロマンスと「いかさまシリーズ」を和解させたといえるのかもしれない (Mentz, "Wearing" 85-86)。

シェイクスピアは『冬物語』において、グリーンが書いたパストラル・ロマンス『バンドスト』と「いかさまシリーズ」を融合させることで、虚実入り混じった当時のイギリスの文化的背景における幸福な「騙し」にみちた世界を作り出したのである。

V 自然 (Nature) と人工の手 (Art)

最後にこの虚実入り混じった世界という観点から、『冬物語』の二つの場面を見直してみたい。4幕4場のポリクシニーズとパーディタの間で交わされる「自然」と「人工の手」の議論の場面と5幕2場・3場のハーマイオニの像に関する場面である。

1. 4幕4場における「自然」と「人工の手」

4幕4場で交わされるこの論争は『冬物語』のなかで短いがとくに有名な場面である。「自然」と「人工の手」の区別や優劣についての議論をポリクシニーズとパーディタが交わす場面で、当時から問題とされたトピックである。たとえば、パフォード (J. H. P. Pafford) は、当時の考え方を代表するものとして、「人工の手」の入らない「自然」を貴ぶパーディタの側に立つのがモンテーニュ (Montaigne) であり、「人工の手」が「自然」の助けとなるとするポリクシニーズの側に立つのがパットナム (George Puttenham) であると述べる (Pafford 169-70)。作品の根幹となる問題に通じるものだが、ここでは虚実が入り混じった問題としてみていこう。まず、その最初の部分を引用する。パーディタの言い分である。

... the fairest flowers o' th' season
Are our carnations and streaked gillyvors,
Which some call Nature's bastards; of that
kind
Our rustic garden's barren, and I care not
To get slips of them. (4.4.81-85)
この季節のいちばん美しい花は、
カーネーションと自然の私生児とも呼ばれる
縞ナデシコですが、その種の花は私ども
の田舎の庭には
咲いていませんし、私も一茎だって欲しいと
思ったことはありません。

縞ナデシコ (streaked gillyvors) が自分たちの田舎の庭にはないのは、それらが「自然の私生児」 (Nature's bastards) と呼ばれているからだ。ここで注意したいのは、この bastard の意味が「私生児」、 「交配種」の意味だけでなく、「偽物の」 (counterfeits) の意味もあるということだ (OED (a. 4))。この点はピッチャーもオーゲルも指摘している (Pitcher 264, Orgel 172)。パーディタはこれに続けて次のよ

うにいう。

For I have heard it said
There is an art which in their piedness
shares
With great creating Nature. (4.4.86-88)

あの赤と白のまだら模様は、
偉大な造化の自然に人工の手が加わって
できたもの、と聞いておりますので。

このartの意味は、本来の「自然」に加わった、何らかの「人工の手」ということであり、そのようなものは「偽物」というのがパーディタの主張である。そしてパーディタは「虚実」を明確に区別し、「偽物」を排除しようとするのである。

人工の手が加わったものは偽物である、というパーディタの主張に、ポリクシニーズは次のように答える。

Say there be,
Yet Nature is made better by no mean
But Nature makes that mean. So over that
art,
Which you say adds to Nature, is an art
That Nature makes. You see, sweet maid,
we marry
A gentler scion to the wildest stock,
And make conceive a bark of baser kind
By bud of nobler race. This is an art
Which does mend Nature—change it
rather—but
The art itself is Nature. (4.4.88-97)

そうかもしれない。
だが、自然がなんらかの手を使ってよくなるなら、
その手を作ったのも自然なのだ。だからその人工の手、
あなたが自然に加えたという人工の手も自然が作ったものなのだ。いいか、お嬢さん野育ちの幹に育ちのいい若枝を結婚させ、卑しい木に高貴な子を宿らせることがあるだろう。これが自然の足りなさを補う、というか、変えてしまう、人工の手なのだ。人工の手が自然そのものなのだ。

つまり、「自然」に加わった「人工の手」も自然が作ったものである。そして、接木の例を出して、そのように自然を変える「人工の手」はそれ自

身も「自然」であると主張する。ポリクシニーズにしたがえば、「自然」と「人工の手」は明確に区別できず、「自然」と「人工の手」の関係は対立するよりも共存するものであり、「人工の手」は「自然」を補綴するものでもある。したがって「偽物」というものではない。

パーディタはポリクシニーズの主張に「そうですね。“So it is.” (4.4.97)」と一言、いったんは認める。それは野育ちの自分と育ちのいい王子の関係に当てはまるなら、そうあってほしいと思うからであろう。

だが、「ならば縞模様のナデシコを bastards (偽物) (4.4.99) などと呼ぶな」と言うポリクシニーズにパーディタはなおも反論する。パーディタはartの例として化粧を持ち出して、そのような人工の手を用いることでしか子孫を残すことができないのなら、同様に人工の手の入った gillyvors を植えることはしないと述べる。

I'll not put
The dibble in earth to set one slip of them;
No more than, were I painted, I would wish
This youth should say 'twere well, and only
therefore
Desire to breed by me. (4.4.99-103)

私はわざわざ土を掘って
一茎でも植えるつもりはありません。
私が化粧をしたら、このかたが私をきれいだ
と言って
それだけの理由で私に子供を宿してほしいと
お望みになって欲しくないのと同じです。

パーディタが縞ナデシコ嫌う理由は、それに人工の手が入っているだけでなく、それによって自然や人々を欺く花でもあると考えるからだ。実際には、縞ナデシコは自然交配もあると考えられていたようだが、いずれにせよその縞模様が化粧を連想させ、化粧をした女性は不貞と思われていたことから、不貞を連想させる花であった (Pafford 170)。

この「自然」と「人工の手」の議論は結局、平行線をたどったまま終わる。ポリクシニーズはよい例として接ぎ木の例を挙げて「人工の手」も「自然」のうちだと述べるのに対し、パーディタは悪い例として化粧の例を挙げて、「人工の手」は「自然」に手を加えて人を欺き、性的欲望をかきたてるものと主張するからである。ポリクシニーズが両者を区別できないものとするのに対し、パーディタは区別で

きるとするのが、両者の考え方の違いにつながっている。パーディタから見れば、「人工の手」がすることは、ならず者文学に登場するベテン師のやるいかさまと変わらないのである。

しかしながら、グリーン影が至る所に見られるこの劇において、「騙し」や「いかさま」を排除することは、劇を支配している力に反するものであることはいうまでもない。なにしろ、パーディタ自身が仮の姿であり、さらには王子と一緒に王を欺いているのである。知らず知らずに、パーディタも「ベテン」の世界にはまっぴらなのである。

2. ハーマイオニの像 (Art) と蘇り (Nature)

「人工の手」と「自然」の問題は、5幕にハーマイオニの像が開示される時に再び現れる。まず、ハーマイオニ像のことが宮廷紳士の一人から観客に噂話のように報告され、観客の興味をそそる。

The princess, hearing of her mother's statue, which is in the keeping of Paulina, a piece many years in doing and now newly performed by that rare Italian master Giulio Romano, who, had he himself eternity and could put breath into his work, would beguile Nature of her custom, so perfectly he is her ape. He so near to Hermione hath done Hermione that they say one would speak to her and stand in hope of answer. (5.2.92-99)

お姫様はポーライナ様がお持ちのお母様の像のことをお聞きになり、その像はかの驚くべきイタリアの天才芸術家ジュリオ・ロマーノが長年かけて製作し、このほど完成したのですが、ロマーノはもし彼自身に永遠の時間があって作品に息を吹き込むことができるならば、「自然」を欺いてその仕事を奪ってしまうかと思われるほどに、完璧な「自然」の模倣者 (ape) なのです。彼の創ったハーマイオニはあまりにもハーマイオニ様に似ているので、話しかけたら返事をしてもらえないのではとってしまうほどなのです。

ハーマイオニ像はまるで生きているかのような像であり、ロマーノ (Giulio Romano) の Art が「自然」の作った生身の人間をしのぐかの如くである。ここでは「人工の手」が賞賛もされていると同時

に、あくまで「自然」を模倣したものであり、「自然」を模倣する「猿」(ape) と呼ばれており、「自然」が上であり「模倣」は「模倣」に過ぎないという含意がある。だが作者とされるロマーノはテ宮殿 (Palazzo del Te) などの騙し絵でも有名である。本物の石と壁に描いた石の区別がつかない騙し絵は本物と偽物の境界を曖昧にし、「自然」と「人工の手」の優劣や区別を不確定なものとする。ハーマイオニの像がロマーノの作品とされることは、虚実が入り混じって真偽が見分けにくいこの劇を象徴するものである。そして、その像が騙し絵的なもので、本物かもしれないことを示唆している。

もう一つ興味深いことは、ハーマイオニが彫像の「ふりをする」(counterfeit) ことである。これはまさしく「ならず者文学」の登場人物たちが行ってきた「騙し」の手口である。

ここで、パーディタの化粧への言及が形を変えてユーモラスに取り上げられる。パーディタは「化粧」が偽物を作る「人工の手」としていたが、ハーマイオニ像について繰り返し言及されるのが、像に塗られているとされる絵の具である。これはある意味で生身の像の「化粧」である。もちろん実際には絵の具が塗られているわけではなく、ポーライナが像に触れられるのを避けるための「嘘」である。大団円の和解へ至るために、ポーライナはいわば、「化粧」を利用した「嘘」をついたのである。ハーマイオニ像を開示するときに、偽物であることがばれないようにごまかすポーライナとレオンティーズのユーモラスなやりとりにも、まず現れる。ハーマイオニ像を初めて見たレオンティーズは「叱ってくれ、いや叱らないからこそあなたらしい」(5.3.24-26) と改めて罪を悔いながらも、ふと違和感を覚えたのか、次のように言う。

LEONTES. But yet, Paulina

Hermione was not so much wrinkled,
nothing

So aged as this seems.

POLIXENES. O, not by much.

PAULINA. So much the more our carver's
excellence,

Which lets go by some sixteen years and
makes her

As she lived now. (5.3.27-32)

レオンティーズ. しかし、ポーライナ、

ハーマイオニはこんなにしわはよっていなかった、

これほど年を取ってはいなかった。

ポリクシニーズ。 それほどには。

ポーライナ。 それだけこれを刻んだ人がすぐれているということです。

十六年ほどの歳月を経たように、そして
現在生きておられるかのように

この像をつくったのです。

厳粛な場面での、レオンティーズのこの台詞は笑いを誘ったに違いない。ポリクシニーズの返事は原文では、“O, not by much.”だが、レオンティーズに賛成しているようにも、反対しているようにも取れる曖昧な返事である。ピッチャーもその両方での意味を注として書いている (Pitcher 339)。ポリクシニーズはどう答えたものか戸惑いながら、断定を避けてはぐらかしたものと取れるであろう。ポーライナがその場をなんとかごまかすところは、大団円の幸せな終幕を迎えるための喜劇的雰囲気盛り上げる。

このユーモラスなやりとりはさらに続く。ポーライナを困らせることに、次はパーディタが像の手に触ろうとする。

PERDITA. Give me that hand of yours to
kiss.

PAULINA. O patience!

The statue is but newly fixed; the colour's
Not dry. (5.3.46-48)

パーディタ。 どうかあなたの手に口づけさせてください。

ポーライナ。 おお、がまんしてください。

その像はまだ色を塗ったばかりですので、
乾いておりません。

ついに、がまんできなくなったレオンティーズが、
像の口に口づけしようとする。

LEONTES. Let no man mock me,
For I will kiss her.

PAULINA. Good my lord, forbear,

The ruddiness upon her lip is wet.

(5.3.79-81)

レオンティーズ。 だれも笑わないでくれ。

わたしは口づけをしようと思うのだ。

ポーライナ。 王様、どうかおやめください。

唇の赤い絵具はまだぬれております。

ここでは、パーディタが否定した「化粧」のモチーフがみだらな欲望ではなく、笑いを誘うものとして使われている。自然を模倣した像に彩色し、本物らしくした「見せかけ」に、レオンティーズが誘惑され欲望を抑えきれなくなったことは、先にパーディタが非難した、化粧の見せかけで恋人の欲望がかき立てられたことに通じるが、その「人工の手」に対する非難が笑いのなかで解消させられようとしている。

「自然」と「人工の手」の優劣に関しては、結果として、ハーマイオニ像は「自然」の造形した生身の人間であることが判明するのだが、だからといって「自然」が「人工の手」に勝ったとは言い切れない。むしろ、それを見抜けなかったことに、「自然」と「人工の手」の区別がつかないことが明らかとなる。

人々は最初、「自然」に迫らんとする「人工の手」に感嘆した。そして、この「偽物」が「本物」であることが判明したときには、ポリクシニーズの言葉で言えば、「人工の手」が「自然」そのものと見分けがつかないことを証明したことにもなる。もはや両者の優劣はどうでもよいことである。結果として幸福な結末が待っていたのだ。パーディタの貶めた「化粧」もここでは貶められることなく、ハーマイオニ自身が「化粧」をしていたかどうかは定かではないが、どちらにせよ、ハーマイオニという「自然」の一部であり、ポリクシニーズの主張に味方する。むしろ、「偽装」がレオンティーズとハーマイオニの和解を可能にしたのであり、「虚」があったから「実」が実現したのである。「騙し」が幸福な結果を生んだのである。

VI おわりに

4幕4場の議論を見ていた観客はポリクシニーズとパーディタのどちらに軍配を上げただろうか。おそらく理屈っぽいポリクシニーズよりも健気で純真なパーディタではないだろうか。「嘘」よりも「真実」に魅かれたであろう。しかし、最後の場面では、理屈はとにかくとして、「嘘」が「真実」に変わったこと、あるいは「嘘」が「真実」を生み出したこと、ポリクシニーズの言うように、両者が支え合うような関係であることに喜びを見出したであろう。そして、ユーモラスなやりとりから、ハーマイオニが生

きていることへの期待を抱きながら、実際にハーマイオニが動いたことへの感嘆と感動を劇の登場人物たちとともに分かち合ったことであろう。シェイクスピアが観客も騙してくれたのだ。

最後に一つ気になることがある。ハーマイオニの像は本当にハーマイオニだったのだろうか、ということである。もしかしたら「魔術」による幻影だったのかもしれない、とも思えてくる。なにしろシェイクスピアは次の作品『テンペスト』(*The Tempest*)で「魔術」(art)³を駆使して幻影を操るプロスペロー(Prospero)を主人公とした作品を書いたのだから。ポーライナ自身がハーマイオニの像を動かす前に、「わたしが不法な手段に関わっていると思う人は去ってほしい。"Or those that think it is unlawful business / I am about, let them depart." (5.3.96-97)」と訴え、「わたしの呪文は合法的なもの"my spell is lawful" (5.3.105)」とも言っている。そしてレオンティーズも「これが魔術なら、魔術も食事同様に合法的な術(art)と認めよう。"If this be magic, let it be an art / Lawful as eating." (5.3.110-11)」と答えている。「自然」と「人工の手」(art)の不可分さを見てきたわれわれにとっては、ここでartという語が使われているのは気になる場所である。artが当時「魔術」の意味で使われたことを考えれば、ハーマイオニ像が魔術によるものという可能性を否定できない。少なくとも、ピッチャーも言うように、われわれは、彫像がハーマイオニに変化したことにも、しなかったことにも決して確信を持ってないが、登場人物と観客のそれを強く願う気持ちが心の中で奇跡を起こすのである、(Pitcher 72)。逆に言えば、そこに疑いが生ずれば奇跡は生まれないのであり、最後の場面に気持ちの悪い曖昧さを残したままにするのは、シェイクスピアの他のいくつかの作品においてもあったことである。最後の奇跡を信じつつも、ときに結末が気になってしまうのは、この劇がどっぷり浸かっている「騙す」ことにあふれかえった当時の英国風土と、疑心暗鬼で真偽の分からなくなった世界を見すぎたせいかもしれない。レオンティーズの最後の言葉「急いで案内してくれ。"Hastily lead away." (5.3.155)」というのに応じてわれわれを導くのは、この劇を支配してきた詐欺師の守護神である霊魂導師マーキュリーにも思えてくるのだ。

* 本文中の *The Winter's Tale* からの引用は、John Pitcher 編の *The Arden Shakespeare* からのものである。日本語訳は既存の訳をもとに一部表現等改めたものである。グリーン作品の『パンドスト』『いかさま案内(第三部)』『グリーン一文の知恵』の訳は多田幸蔵訳をもとに一部表現等改めたものである。

** 本稿の一部は、名古屋大学英文学会第59回大会シンポジウム『シェイクスピアが騙す』(司会・講師 滝川睦(名古屋大学), 講師 斎木郁乃(東京学芸大学), 陳璐(富山高等専門学校), 内藤亮一(富山大学), 八鳥吉明(松山大学), 服部厚子(鈴鹿医療科学大学))(2021年9月11日, オンライン開催)での発表『冬物語』における騙しのモチーフ:「ならずもの文学」(特にロバート・グリーン)との関係において」に基づくものである。なお、題目が類似する拙稿(参考文献参照)とは、この発表および本稿は重複しないものである。

謝辞

本稿執筆にあたっては全体にわたって、名古屋大学大学院教授・滝川睦先生から多くの助言を賜った。記して感謝する次第である。

参考文献

- Dionne, Craig and Steve Mentz. editors. *Rogues and Early Modern English Culture*. U of Michigan P, 2004.
- Greene, Robert. *Groats-Worth of Witte, Bought with a Million of Repentance. The Repentance of Robert Greene*, 1592. The Bodley Head Quartos VI. edited by G.B. Harrison. London: John Lane, 1923. Internet Archive, <https://ia801602.us.archive.org/5/items/groatsvorthofwi00greeuoft/groatsvorthofwi00greeuoft.pdf>, accessed 10 October 2023.
- . *A Notable Discovery of Coosenage Now Daily Practised by Sundry Lewd Persons, Called Connie-Catchers, and Crosse-Byters*. London: Printed by Thomas Scarlet for Thomas Nelson, 1592. *Early English Books Online Text Creation Partnership*, <http://name.umdl.umich.edu/A02140.0001.001>, accessed 8 September 2021.
- . *Pandosto: The Triumph of Time*. 1588, 1592. in

- The Winter's Tale*. edited by John Pitcher. The Arden Shakespeare, Third Series. A&C Black, 2010, pp. 406-45.
- . *Pandosto the triumph of time*. London, 1588. *Early English Books Online Text Creation Partnership*, <http://name.umdl.umich.edu/A02143.0001.001>, accessed 21 December 2021.
- . *The Second Part of Conny-Catching Contayning the Discouery of Certaine Wondrous Coosenages, Either Superficialle Past Ouer, or Vtterlie Vntoucht in the First*. London: Printed by Iohn Wolfe for William Wright, 1591. *Early English Books Online Text Creation Partnership*, <http://name.umdl.umich.edu/A02141.0001.001>, accessed 8 September 2021.
- . *The Third and Last Part of Conny-Catching With the New Deuised Knauish Arte of Foole-Taking. The Like Coosnages and Villanies Neuer Before Discovered*. London: Printed by T. Scarlet for C. Burby, 1592. *Early English Books Online Text Creation Partnership*, <http://name.umdl.umich.edu/A68113.0001.001>, accessed 8 September 2021.
- Iwasaki, Soji, *Nature Triumphant: Approach to The Winter's Tale*. 1984. Sanseido, 1991.
- Kinney, Arthur F. editor. *Rogues, Vagabonds and Sturdy Beggars*. U of Massachusetts P, 1990.
- Kurland, Stuart M. "We Need No More of Your Advice": Political Realism in *The Winter's Tale*." *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol. 31, no. 2, Spring 1991, pp. 365-86. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/450816. DOI: 10.2307/450816
- Mentz, Steve. "Magic Books: Conny-Catching and the Romance of Early Modern London." *Rogues and Early Modern English Culture*. edited by Dionne and Mentz. pp. 240-58.
- Mentz, Steven R. "Wearing Greene: Autolycus, Robert Greene, and the Structure of Romance in 'The Winter's Tale.'" *Renaissance Drama*, vol. 30, 1999, pp. 73-92. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/41917356
- Orgel, Stephen. Introduction and Notes. *The Winter's Tale*. By William Shakespeare. edited by Orgel. Oxford World's Classics. Oxford UP, 1996.
- Pafford, J. H. P. Introduction and Notes. *The Winter's Tale*. By William Shakespeare. edited by Pafford. The Arden Shakespeare. Methuen, 1963.
- Pitcher, John. Introduction and Notes. *The Winter's Tale*. By William Shakespeare. edited by Pitcher. The Arden Shakespeare, Third Series. A&C Black, 2010.
- Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. vol. 1. Dover, 1971.
- Shakespeare, William. *The Tempest*. edited. by Frank Kermode. The Arden Shakespeare. Methuen, 1977.
- . *The Winter's Tale*. edited. by John Pitcher. The Arden Shakespeare, Third Series. A&C Black, 2010.
- Whitney, Geoffrey. *A Choice of Emblemes*. 1586. Theatrum Orbis Terrarum, 1969.
- グリーン, ロバート『パンドスト王・いかさま案内他』多田幸蔵訳 北星堂, 1972年
- シェイクスピア, ウィリアム『冬の物語』大山敏子訳 旺文社, 1977年
- シェイクスピア, ウィリアム『冬の夜語り』『シェイクスピア全集3・喜劇III』福原麟太郎・岡本靖正訳 筑摩書房, 1967年
- シェイクスピア, ウィリアム『冬物語』栞山智成訳 岩波文庫, 2023年
- シェイクスピア, ウィリアム『冬物語』『シェイクスピア全集V』小田島雄志訳 白水社, 1978年
- 内藤亮一「シェイクスピアの『冬物語』における「騙し」のモチーフ」『富山大学人間発達科学部紀要』15巻2号(2021) pp. 97-107.

注

- 1 「時の勝利」を含め『冬物語』とエムブレムの関係については, Soji Iwasaki, *Nature Triumphant: Approach to The Winter's Tale*. (1984; Sanseido, 1991) に詳しい。
- 2 *EEBOTCP* からの引用はデジタル版のためページ記載はない。以下の引用の際も同様。
- 3 たとえばプロスペローの娘ミランダ (Miranda) が, 彼らが流刑にされた無人島から沖合の船が難破しかけているのを見て, 隣の父に「もしあ

あなたの魔術 (art) によるものなら, 荒れ狂う海を鎮めてください。"If by your Art, my dearest father, you have / Put the wild waters in this roar, allay them." (1.2.1-2)」と頼む。プロスペローは心配しなくても, なにも害はない (1.2.13-15), と答える。この箇所以外でも art が魔術の意味で使われるのは当時普通であり, その魔術によってプロスペローは幻影を見せたり, 人を操ったりする。(Cf. Schmidt, *Shakespeare Lexicon*, art 1. Sometimes=magic)

受付年月日 (2023/10/20)

受理年月日 (2023/12/22)